

# 三太郎の日記

—— 映画文学人生論

原作: 阿部次郎 (1914-15) 「岩波書店」  
参考: 狐火 (1911) 「ホトトギス」  
倫理学の根本問題 (1916) 「岩波書店」  
美学 (1917) 「岩波書店」  
漱石書簡集 (1990) 「岩波書店」

僕は牧師となることを恐れ、教育家となることを恐れ、通俗小説家となることを恐れる

『三太郎の日記』は小説ではない。阿部次郎は夏目漱石の門弟ではあるが、正岡子規の門弟ではない。「子規篇」として『三太郎の日記』をとりあげるのはまずいかなという気もしたが、阿部は「ホトトギス」明治四十四年四月号に『狐火』という小説を発表したことがある。そんな縁があるなら、まあいいだろうと、判断した。

その判断を後押ししたのは、漱石が阿部からの葉書に対して出した返書に注目したためだ。阿部の葉書は漱石が明治四十三年三月から六月まで朝日新聞に連載した『門』への感想で、それに対する漱石の返書は次の通り。

「拝啓 葉書をありがとうございます。『門』が出たときから今日まで誰も何もいつてくれるものは一人もありませんでした。私は近頃孤独という事に慣れて芸術上の同情を受けなくてもどうか暮らして行けるようになりました。従って自分の作物に対して賞賛の声などは全く予期していません。しかし『門』の一部分が貴方に読まれて、そうして貴方を動かしたという事を貴方の口から聞くと嬉しい満足が湧いてきます」。

『門』のような作品に対する読者の反応が連載終了後二年以上たってやっとあらわれたとは意外



## 三太郎の日記

映画文学人生論

だが、それはともかく、阿部次郎は『門』のどこに反応したのだろうか。おそらく、「彼は門を通る人ではなかった。また門を通らないですむ人でもなかった。要するに、彼は門の下に立ちすくんで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」と迷っている主人公宗助の心理描写だと思う、その根拠は『三太郎の日記』の記述にある。たとえば、三太郎は「僕は牧師となることを恐れ、教育家となることを恐れ、通俗小説家となることを恐れる」と書いているが、これは門の下にたたずむ宗助の姿と重なってくる。

宗助の門は仏教、三太郎の門はキリスト教という違いはあるが、いずれも宗教の門である。通俗小説家といえば、読者の俗情にこびて金儲けになりそうな作品を書く作家だ。阿部次郎はそもそも小説家のタイプではない。

結局、三太郎即ち阿部次郎は迷いながら教育家になった。東北大学の法文学部長として定年退官し、仙台市名誉市民になっているから教育者としては成功したようにはたからは見える。

『三太郎の日記』は、大正・昭和期の青春のバブルとされ、哲学的教養をもとめる学生の必読書となった。しかし、門の下に立ちすぐんでいるような人の教養ではあまり頼りにならないような気もする。

生きる為の職業は、魂の生活と一致するものを選ぶことを第一とする

阿部次郎